

## 『大和国當麻寺縁起』校注稿

中野 顕 正

『大和国當麻寺縁起』は、鎌倉期における當麻曼陀羅縁起の流布本となった文献である<sup>※</sup>。従って、同書は曼陀羅縁起の史的展開を検討する上で極めて重要な位置を占めるものだが、唯一の伝本である仁和寺蔵本に誤脱等が少なからず含まれていることから、従来通読には難が遺されていた。本稿は、同書の校訂案を示し、併せて訓読と簡単な語注を付すことで、研究の便に供するものである。

但し、伝本が仁和寺蔵本以外に存在しない以上、厳密な校訂には困難が伴う。本稿の校訂では、主として対句構造の復元という立場からの字句の修訂、ならびに『私聚百因縁集』巻七―四、『浄土十勝論』第九十三、『當麻曼陀羅疏』巻六・七との校合という方法を用いた。このうち後者については、この三書には『大和国當麻寺縁起』の文言を直接踏襲したと推測される箇所が相当程度含まれており、仁和寺蔵本の誤脱を修訂することが或る程度可

能と判断されたためである。従って、本稿で示した校訂本文は、あくまでも『大和国當麻寺縁起』を通読可能な状態にするための一案に過ぎないものと理解されたい。

※ 『大和国當麻寺縁起』が鎌倉期における當麻曼陀羅縁起の流布本であったと考えられる点については、拙稿「中世前期における當麻曼陀羅縁起の系譜」（『都留文科大学研究紀要』九十四、二〇二一年十月）を併せて参照されたい。

### 一、校訂本文

#### (1) 凡例

一、底本には、現存唯一の伝本である仁和寺蔵本を用いた。なお、同本の書誌および翻刻（返点・付訓・見セ消子等を含む）

については拙稿「仁和寺蔵『大和国當麻寺縁起』翻刻」(『弘前大学国語国文学』四十三、二〇二二年三月) 参照。

一、行移りは底本に従わず、送り込みとした。  
一、底本において小字や割注となっている箇所は、山括弧〈 〉によって表示した。

一、底本の返点・付訓は省略した。但し、付訓が字句比定上の重要な情報となる場合に限り、(3)校訂注欄に示した。

一、底本のうち見せ消ちによる文言修正の箇所については、修正後の本文を採用した。

一、読みやすさを考慮し、私に句読点・鉤括弧等を補った。

一、以下の方針によって字句の修訂を行い、修訂箇所は(3)校訂注欄に明示した。

1…誤写や宛字と判断される箇所は修訂した。

2…対句構造の観点から、脱字と思われる箇所を私に補い(之・於など)、衍字と思われる箇所を削除し、語順を改めるなどした。また、脱字と思われる箇所のうち該当する字が不明の箇所は「□」とした。

3…割注等が本行化したと思われる箇所は修訂した。

4…『大和国當麻寺縁起』の影響下に成立した縁起文献のうち、特にその文辞を継承していると考えられる『私聚百因縁集』巻七—四(校訂記号〈百〉)、『浄土十勝論』第九十三

(校訂記号〈十〉)、『當麻曼陀羅疏』巻六・七(校訂記号〈疏〉)との文言比較により、字句の修訂をおこなった。このほか、『大和国當麻寺縁起』の影響下に成立した他の縁起文献をも参照して修訂をおこなった箇所がある。なお、『私聚百

因縁集』は巻八—一にも『大和国當麻寺縁起』の影響下に成立したと思しい記述が存在するが、極めて限定的な記述に留まるものであるため、今回の修訂には用いなかった。これらは、あくまで『大和国當麻寺縁起』を通読可能なものとするための措置であり、ここに示した各文献との全異同を網羅したものではない。

一、字句修訂の際に用いた資料の出典は以下の通り。

・『私聚百因縁集』…国文学研究資料館蔵 承応二年版本(現存唯一の伝本)。同館「新日本古典籍総合データベース」による。

・『浄土十勝論』…北海学園北駕文庫蔵 嘉永五年版本。国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる。なお、同本は寛文三年(二六六三)版本と燈誉良然筆写本(現存せず)とを校合したもので、両本の校異を鼈頭として記している。燈誉良然は戦国期の浄土宗鎮西義僧。

・『當麻曼陀羅疏』…国文学研究資料館蔵 慶安二年版本(巻六・七については現存唯一の伝本)。同館「新日本古典籍総合データベース」による。

・称名寺本『當麻曼荼羅縁起』…神奈川県立金沢文庫図書閲覧室の紙焼写真により、高橋秀栄「極楽寺願海筆『當麻曼荼羅縁起』について」(『金沢文庫研究』三〇六、二〇〇一年三月) 所収の翻刻をも参照した。

・享禄本絵巻…奈良国立博物館仏教美術資料研究センター「画像データベース」により、展覧会図録『當麻寺』(奈良国立博物館、二〇一三年) 二二二—二四〇頁所収の翻刻を

も参照した。

一、本稿以前の段階で、既に高橋伸幸「當麻寺創建説話の展開」〔札幌大学女子短期大学部紀要〕九、一九八七年二月)により、前半の「當麻寺(実名禪林寺)」条および「以当寺遷作他所事」条については校訂案が示されている。その校訂は、『私聚百因縁集』および『當麻曼陀羅疏』との比較に基づくものであり、方法論の上で本稿はこれを参考にした。但し、高橋稿の校訂結果自体には必ずしも従わなかった箇所がある。

## (2) 校訂本文

大和国當麻寺縁起

一、當麻寺<sup>1</sup>(実名禪林寺)

右当寺者、用明天皇第三御子麿子親王建立之伽藍也。粗勘流記、聖德太子<sup>2</sup>与麿子親王者、分形<sup>3</sup>連氣之<sup>4</sup>御兄弟也。忝以親昵之<sup>5</sup>重儀、互談真俗之深理。即太子勸云、「仏日流西、梵風扇東以來、漢土白馬寺、教釈伝辰旦之<sup>6</sup>始也、我朝青龍地、仏法弘日本<sup>7</sup>之源也。当知、伽藍者三宝依処、精舍者万善根元者歟。唯願、且為紹隆三宝、且為濟度群生、速基立<sup>8</sup>堂塔、宜興行仏法」(云々)。因之親王、依<sup>9</sup>太子<sup>10</sup>教命、推古天皇二十年(歲<sup>11</sup>次壬申)、經奏聞、下官旨。其状(云々)、「因准法隆寺、宜為御願寺」。其後、凝信心始土木<sup>12</sup>之宮、傾産業終成風之功。金堂・講堂・鐘樓・經藏・二基<sup>14</sup>塔廟・三面僧房・宝藏・大門等、皆悉造立供養畢。〔又〕別奉鑄<sup>15</sup>救世觀音形像一体、被安置寺庫。即以寺号万法藏院矣。

一、以当寺遷作他所事

右建立之後、經六十一年、天武天皇御宇白鳳二年(癸酉)、麿子親王忽感靈夢。「早改彼伽藍、可遷作于役行者練行之砌」(云々)。親王、夢驚神動。吉凶難測、<sup>16</sup>冥顯有憑。以瑞夢之趣、達明君之聞。忝降紫泥之新命、「宜<sup>17</sup>改花界之旧蹤」(云々)。親王、即相伴勅使三品刑部卿親王(天武天皇第九御子)、尋<sup>18</sup>到役行者<sup>19</sup>坐禪之庭。爰行者、聞夢想之旨、拭隨喜之淚、披勅宣之状、含感歎之咲。「永以此勝地、奉施彼伽藍。山水蓄奇、草樹含異。時処相應、感応道交者歟」(云々)。仍親王、速欲果<sup>20</sup>遷寺之願之処、去朱雀元年(壬申)五月日、大友<sup>21</sup>太政大臣、争王位、起謀叛。天皇、廻計<sup>22</sup>於帷帳之中、得勝於万里<sup>23</sup>之外。然而、余氣未盡、一天不謚之間、造宮志自然遲暮。遂乃、始自白鳳<sup>24</sup>十年(辛巳)二月十五日、至于同白鳳<sup>25</sup>四年(乙酉)、經首尾五年、堂塔僧房等、<sup>26</sup>悉如經始之昔、漸企成風之功。終安滿月尊。但今度、金堂丈六金色弥勒<sup>27</sup>菩薩土像也。御身中奉納金銅一揆<sup>28</sup>手半孔雀明王像一体。此仏像、行者多年御本尊也。兼又、今度被副安置四天王像。一体者、依役行者祈願力、自<sup>29</sup>百濟国渡万里煙浪、忽然飛來給(云々)。又金堂前有一言主<sup>30</sup>明神<sup>31</sup>來坐之石。行者、於此石砌、久勤修<sup>32</sup>孔雀明王秘法、令祈念興隆仏法利益衆生願。以高麗国惠觀僧正、為開眼導師。調供養之儀、道具驚眼。沈<sup>33</sup>檀飛煙、苔蔔翻色。欲色諸天悉集、人類庶類無<sup>34</sup>漏。鄭重不可得<sup>35</sup>称。于時役行者、自金剛山來法会庭言、「在家高祖兩人<sup>36</sup>(即、高賀茂老翁間駕介磨子是也、二同姓<sup>37</sup>白摩渡都岐磨子是也(云々))私領山林田畠數百町、永令施入当寺畢」。

<sup>38</sup>実、我等是四衆歸依之濫觴也、抑又非一天興隆之道場哉(云々)。

## 一、当寺極樂之曼荼羅事

右当寺最初建立之後、送百五十二歲星霜、大炊天皇御宇（人代四十七代王、天武天皇孫、一品舍人親王第七子。号淡路廢帝。有子細）、有一臣下。世号横佩大納言尹統朝臣。<sup>39</sup>朝之賢知、世之神才也。在<sup>40</sup>鍾愛女。被養倚窓<sup>41</sup>之中、長于羅帳之下。其性清<sup>42</sup>素、不染紅塵。輕人間榮耀、志偏通弥陀<sup>43</sup>之願海、事林下幽閑、<sup>44</sup>深賴安養之煙霞。自書写称讚淨土經一千卷、開題称揚、被安置宝藏。花文不改、露点猶鮮。其後天平宝字七年（癸卯）六月十五日、落蒼花帰仏乘、抽丹心祈菩提。親臨道場、殊立誓約。「我、若無見生身<sup>45</sup>之弥陀、永不出伽藍之門闥」。更契七日光<sup>46</sup>陰、專期滿月照臨。懇念不緩、匪石之誠至深、冥心無暗、明鏡<sup>47</sup>之感盍及。然間、同月廿日酉剋、一尼忽然化来。<sup>48</sup>禪容色鮮、<sup>49</sup>三衣袂馥。窃相示<sup>50</sup>云、「倩見慇懃之儀、不堪感歎之思。汝年来為顯仏像、頗雖集蓮糸、機感未熟、誓願如虛。速欲見九品之教主、重宜<sup>50</sup>儲百駄<sup>51</sup>之<sup>52</sup>蓮莖。仏種者必從因縁生起故也」云々。本願禪尼、見聞此事、踊躍余身、隨喜徹骨。仍、注化人之告、驚聖<sup>53</sup>主<sup>54</sup>之聽。忝垂叡感、<sup>55</sup>忽降詔命。即忍海連承宣旨、催廻蓮莖於近國中。纔經一兩日、九十余駄之蓮<sup>56</sup>莖出来。化人、自折蓮莖、繆出乱糸。克調糸已、始堀清井、水湛々、浪溶々。臨水濯糸、其色自然五色。傍人觀之、莫不<sup>57</sup>嗟歎。至同廿<sup>58</sup>三日之夕、有女人化来。容貌端嚴、不可得称。女人<sup>59</sup>問化尼<sup>60</sup>聞導、「蓮糸已被調<sup>61</sup>儲得哉、如何」。<sup>62</sup>答云「爾也」。即捧糸授之。因茲化女、執薰二把、浸油二升、用為<sup>63</sup>灯燭。至道場乾之角、<sup>64</sup>自戌終、至寅始、三更之間、<sup>65</sup>打懸蓮糸於機上、織顯仏像<sup>66</sup>於夜中畢。以竹為軸（相伝<sup>67</sup>云）、無節一兩節間竹<sup>68</sup>云。織女、敬頂戴於一丈五尺曼陀羅、以奉懸<sup>67</sup>於化尼願主兩人

<sup>68</sup>前。其後女人、如電光消、不知行方。化尼、依觀無量壽經誠說、開旨大曼陀羅幽旨。觀夫、曼陀羅莊嚴奇麗嚴飭也、貫珠<sup>69</sup>如飭、<sup>70</sup>戒定惠解之光互輝、<sup>71</sup>伸金似瑩、紫摩黄金之色<sup>72</sup>各映。南<sup>73</sup>縁者一經<sup>74</sup>起之序分也、<sup>75</sup>禁父禁母之往蹤歷々如見、<sup>76</sup>北縁者三昧正受<sup>77</sup>之旨帰也、<sup>78</sup>善男善女之觀門明々無暗。仰中台者、即四十八願莊嚴之淨土、皓然于眼前、顧下方<sup>79</sup>者、又上中<sup>80</sup>下品來迎<sup>81</sup>之花台、<sup>82</sup>森羅于心中。是則、弥陀<sup>83</sup>智願之力、遷他力於日域之雲、大聖定惠之德、<sup>84</sup>顯西土於南浮之堺。当知、一塵法界本来無碍、大小長短豈論定相。今希有而得見、誰不生難遭之想。何<sup>85</sup>暫被当機、而示現応相而已乎。即是遙期遐代、而宜施利生。重作四句之偈頌、密示二重之往縁。「往昔<sup>86</sup>迦葉說法所、今来法基作仏事、卿懇西方故我来、一入是場永離苦」。当知、此処即、古仏経行之庭、靈仙<sup>87</sup>崛宅之境也。朝野遠近、懸<sup>88</sup>恃於曼陀<sup>89</sup>者、老少尊卑、運歩於伽藍者、自除災与楽之達望、至淨土菩提之深益。機縁雖区、仰而不虛。于時本願禪尼、且正拜生身<sup>90</sup>之応相、且委受化人之教訓、泣願宿願<sup>91</sup>之純熟、伏喜仏陀之加被。「嗚呼、妄想障重、本雖隔望於安養之砌、面見感深、今<sup>92</sup>落涙於未曾<sup>93</sup>之境。從今日、至成仏、輕命而專可守、鏤骨而豈敢忘。抑我善知識何所来乎、又彼織女誰人乎」。化尼<sup>94</sup>答云、「汝不知乎、我身是、西方極樂世界之教主也。織女即、我左脇弟子觀音大<sup>95</sup>士也。以本願力<sup>96</sup>故、来令安慰汝也。出離生死之期已得境、往生極樂之行茲可足。深知慈恩、可報仏德」。如此再三相語、慇懃也、甚深也。其後化尼、指西方、入<sup>97</sup>孤雲畢。方今願主、魂<sup>98</sup>恍惚、思悄然。禪容去無<sup>99</sup>跡、只寄思於西利蓮台<sup>100</sup>之<sup>101</sup>暮雲、慈訓留多殘、<sup>102</sup>屢濕袂於東垂蓬屋之曉露。唯願、翻今生永離之愁、為淨土

再会之縁。爾降、曼陀<sup>103</sup>之名称広聞異邦、靈像之帰依普及諸衆。況乎禅尼、瞻仰之窓前、秋月已老、觀想之床上、春風幾廻。送十余年後、<sup>105</sup>光仁天皇御時、宝龜六年(乙卯)暮春三月之天、中旬第四<sup>106</sup>之朝、如宿願<sup>107</sup>遂往生畢。<sup>108</sup>于時、青天高晴、紫雲斜聳。音楽西聞、聖衆東来。端坐頭低、寂然氣絶。面色特鮮、形容如咲。凡厥、平生<sup>109</sup>之靈德、臨終之奇瑞、連綿不遑羅縷而已。

<sup>110</sup>(本) 建長五年(壬丑)四月廿五日(北京於四条之坊門西洞院書写)

〔表書云〕當麻寺縁起(付、私云、以此本大曼陀羅堂為修理之勸進帳)沙門(欠損)

(3)校訂注

- 1・〈実名禅林寺〉…底本では本行本文。 2・与…底本なし。〈疏〉による。
- 3・連…底本なし。〈疏〉による。 4・御…底本なし。〈百・疏〉による。
- 5・重儀…底本「儀重」。 6・始…底本なし。〈疏〉による。 7・之…底本なし。〈疏〉による。 8・堂…底本「当」。〈疏〉による。 9・太…底本「父」。〈百・疏〉による。 10・教…底本「孝」。〈疏〉による。なお、〈百〉は「教命」を「教訓」に作る。 11・次…底本「末」。〈疏〉による。 12・疑…底本「疑」。〈疏〉による。 13・之…底本なし。〈疏〉による。 14・塔…底本なし。〈疏〉による。 15・救世…底本「救」。〈疏〉による。 16・冥…底本「宜」。〈疏〉による。 17・改…底本なし。〈疏〉による。 18・到…底本「致」。
- 19・坐禅…底本なし。〈疏〉による。 20・遷…底本欠損。〈疏〉による。
- 21・太…底本「大」。 22・於…底本なし。 23・之…底本なし。 24・十…底本「十四」。〈疏〉による。また、白鳳二年を癸酉とすることからの計算。

- 25・四…底本「六」。〈疏〉による。また、白鳳二年を癸酉とすることからの計算。
- 26・悉…底本なし。〈疏〉による。 27・菩薩…底本「廿」。 28・手…底本なし。〈疏〉による。 29・百…底本「白」。 30・明神…底本「神明」。〈疏〉による。 31・来坐之石…底本「座石」。〈疏〉の「来座之石」に基づく推測。
- 32・孔…底本なし。 33・檀…底本「壇」。 34・漏…底本「偏」(訓「モル、」)。
- 35・称…底本「講」。 36・即高賀茂…磨子是也(云々)…底本では本行本文。
- 37・白…底本「自」。 38・実…底本傍記「爰歟」。 39・朝之…底本なし。〈百〉の「朝賢智」に基づく推定。なお、〈疏〉は「朝庭賢人」に作る。 40・鍾…底本「鐘」。〈十〉による。 41・之…底本なし。〈十〉による。 42・素…底本「索」(訓「ソ」)。〈百〉による。 43・之…底本「陀」。之を「々」と誤読したことによるか。 44・□…「思」などが入るか。 45・之…底本なし。 46・陰…底本「臨」。〈百・疏〉による。 47・之…底本なし。〈疏〉による。 48・禅…底本なし。〈百〉による。なお、〈疏〉慶安版本は「禅尼容色鮮」に作るが、同書に基づく享禄本絵巻は「禅容色鮮」に作るため、「尼」を含むのは慶安版本独自の誤りか。 49・三衣…底本欠損(一字分)。〈百・疏〉による。 50…底本この箇所「相」あり。 51・之…底本なし。〈十〉による。 52・蓮…底本欠損。〈百・疏〉による。 53・主…底本「王」。〈百・疏〉による。 54・之…底本なし。〈疏〉による。 55・忽降詔命…底本「紹命」(「忽降」なし)。〈百〉の「降紹命」、〈十〉の「忽降綸紵」(称名寺本「當麻曼茶羅縁起」も同様)、〈疏〉の「降紹命」に基づく推定。 56・莖…底本なし。〈疏〉による。 57・嗟…底本「差」。〈百・疏〉による。 58・三…底本「二」(但し字の中央部に虫損あり、「三」の二画目が欠損したとも考えられる)。〈百・十〉による。なお、〈疏〉慶安版本はこの一節を欠くが、同書に基づく享禄本絵巻には「廿三日」とあり、この一節を欠くのは慶安版本独自の誤りか。 59・問…底本「同」。〈百〉による。 60・聞導…底本「聞導」(訓「イフナラク」)。〈百〉による。 61・儲…底本なし。〈疏〉によ

る。なお、〈百〉は「調儲」を「儲調」に作る。62・答云…底本「答々」。〈百・疏〉による。63・灯…底本「炷」（訓「トウ」）。〈百・十〉による。64・自…底本なし。〈百・十〉による。但し〈十〉は「自戊終」を「自戊三点」に作る。65・打…底本「巧」。なお、〈疏〉は「打懸」を「繆懸」に作る。66・於…底本なし。67・於…底本なし。68…底本この箇所「之」あり。69・如飴…底本なし。〈百・十・疏〉による。70・戒…底本なし。〈疏〉による。71・伸…底本「申」。〈百・十〉による。72・各映…底本「映日」。〈疏〉による。73・縁者…底本「乏縁」。〈十〉による。但し〈十〉は「南縁」を「右縁」に作る。74・起…底本「化」。〈百・十・疏〉による。75・禁父…底本なし。〈百・十・疏〉による。76・北…底本「此」。〈百〉による。77・之…底本なし。〈百・十・疏〉による。78・善男善女…底本「善男女」。〈百・十・疏〉の「若男若女」に基づく推定。79・者…底本なし。〈百・十・疏〉による。80・下…底本なし。〈十・疏〉による。81・之…底本なし。〈十〉による。82・森羅于心中…底本「于心中森羅」。〈疏〉による。なお、〈十〉は「森羅于眼前」に作る。83・智…底本「知」。〈百〉による。84・顯…底本なし。〈十・疏〉による。なお、〈百〉は「撰」に作る。85・審…底本「商」（訓「タ、」）。〈疏〉による。86・迦…底本「遂」。〈百・十・疏〉による。87・嘔…底本「嘔」。〈百〉による。88・恃…底本「持」（訓「タノミ」）。89…底本この箇所に「茶」あり。90・之…底本「御」。91・之…底本なし。92・☐…副詞か。93…底本この箇所に「有」あり。94・答云…底本「答々」。〈百〉による。なお、〈十〉は「答曰」に作る。95・士…底本傍記「井」。96・故…底本「古」（訓「ユヘ」）。〈十〉による。97・孤…底本「瓢」。〈百・十〉による。98・悦…底本「悦」（訓「キヤウ」）。〈十〉による。99・跡…底本「蹄」（訓「アト」）。〈百・十・疏〉による。100・之…底本なし。〈疏〉による。101・暮雲…底本「暮」なし。〈百・十〉による。なお、〈疏〉慶安版本は「夕風」に作るが、同書に基づく享禄本絵巻は「ゆふへ

の雲」に作るため、「風」とするのは慶安版本独自の誤りか。102・屢…底本なし。〈百・十・疏〉による。103…底本この箇所に「羅」あり。104・衆…底本「憂」。〈疏〉による。105…底本この箇所に「光任天」あり。106・之…底本なし。107・遂…底本「逐」。〈疏〉による。108・于…底本なし。〈百・疏〉による。109・之…底本なし。110・〈本〉…底本では「建長五年」の左傍に記す。111・☐…「畢」などの字が入るか。

## 二、訓読と語注

### (1) 凡例

一、本文は前掲の校訂本文に基づいた。但し、「其状〈云〉」を「其の状に云はく」とするなど、一部の小字箇所を本行化した。一、仁和寺蔵本の付訓には誤読が多く含まれていると考えられるため、必ずしも同本の付訓には従わず、私に訓読を作成した。従って、本稿に示した訓読はあくまで『大和国當麻寺縁起』の内容を理解するための便宜的なものであり、同書成立当時の訓を再現するものではない。

一、語注作成に際しては、先行縁起文献（『當麻寺流記』等の踏襲に過ぎない固有名詞等については解説を略した箇所がある。これらの点については拙稿「當麻曼荼羅縁起成立考」（『古代中世文学論考』四十三、二〇二一年四月）を併せて参照されたい。

## (2) 訓読

### 大和国當麻寺縁起

#### 一、當麻寺（実名禪林寺）

右当寺は、用明天皇第三の御子、磨子親王建立の伽藍なり。粗ら一流記を勘ふるに、聖徳太子と磨子親王とは、分形連氣の御兄弟なり。忝なくも親昵の重儀を以て、互ひに真俗の深理を談ず。即ち太子勸めて云はく、「仏日西に流れ、<sup>二</sup>梵風東に扇きてより以来、漢土の<sup>三</sup>白馬寺は教釈を辰旦に伝ふるの始めなり、我が朝の<sup>四</sup>青龍地は仏法を日本に弘むるの源なり。当に知るべし、伽藍は三宝の依処、精舎は万善の根元なる者か。唯だ願はくは、且つは三宝を紹隆せんが為、且つは群生を済度せんが為、速やかに堂塔を基立し、宜しく仏法を興行すべし」云々。之に因つて親王、太子の教命に依り、<sup>五</sup>推古天皇二十年（歲次壬申）、奏聞を経て、宣旨を下す。其の状に云はく、「法隆寺に<sup>六</sup>因准し、宜しく御願寺と為すべし」。其の後、信心を凝らして土木の営を始め、<sup>七</sup>産業を傾けて成風の功を終ふ。金堂・講堂・鐘樓・経藏・二基塔廟・三面僧房・宝藏・大門等、皆悉く造立供養し畢んぬ。又た別に救世観音の形像一体を鑄奉り、寺庫に安置せらる。即ち寺を以て万法藏院と号す。

一、当寺を以て他所へ遷作する事

右建立の後、六十一年を経て、天武天皇の御宇、白鳳二年（癸酉）、磨子親王、忽ちに靈夢を感ず。「早く彼の伽藍を改め、役行者練行の砌に遷作すべし」云々。親王、夢驚きて神動ず。吉凶測り難きも、冥顯憑み有り。瑞夢の趣を以て、明君の聞に達す。

忝なくも<sup>一〇</sup>紫泥の新命を降し、「宜しく<sup>二</sup>花界の旧蹤を改むべし」云々。親王、即ち勅使三品<sup>三</sup>刑部卿親王（天武天皇第九の御子）を相ひ伴ひ、役行者坐禪の庭に尋ね到る。爰に行者、夢想の旨を聞きて随喜の涙を拭ひ、勅宣の状を披きて感歎の咲みを含む。「永く此の勝地を以て、彼の伽藍に施し奉る。山水は奇を蓄へ、草樹は異を含む。時処相応し、<sup>三</sup>感應道交せる者か」云々。仍つて親王、速やかに遷寺の願を果たさんと欲する処、去る<sup>四</sup>朱雀元年（壬申）五月日、大友太政大臣、王位を争ひ、謀叛を起す。天皇、計を帷帳の中に廻らし、勝を万里の外に得たり。然れども、余氣未だ尽きず、一天謐かならざる間、造営の志は自然に遅暮す。遂に乃ち、始むること<sup>五</sup>白鳳十年（辛巳）二月十五日より、同白鳳十四年（乙酉）に至るまで、首尾五年を経て、堂塔僧房等、悉く<sup>六</sup>経始の昔の如く、漸く<sup>七</sup>成風の功を企つ。終に<sup>八</sup>満月の尊を安んず。但し今度は、金堂は丈六金色の弥勒菩薩の土像なり。御身の中に金銅<sup>九</sup>一搦手半の孔雀明王像一体を納め奉る。此の仏像は、行者多年の御本尊なり。兼ねて又た、今度は四天王像を副へ安置せらる。<sup>一〇</sup>一体は、役行者の祈願力に依り、百済国より万里の煙浪を渡り、忽然として飛来し給ふ云々。又た金堂の前に一言主明神坐坐の石有り。行者、此の石の砌に於いて、久しく孔雀明王の秘法を勤修し、興隆仏法・利益衆生の願を祈念せしむ。高麗国の恵観僧正を以て、開眼の導師と為す。供養の儀を調べ、道具は眼を驚かす。沈檀は煙を飛ばし、苔蘚は色を翻す。欲色の諸天は悉く集ひ、人類・庶類は漏ること無し。鄭重なること称するを得べからず。時に役行者、金剛山より法会の庭に來りて言はく、「在家の高祖兩人（即ち、<sup>三</sup>高賀茂老翁間駕介磨子

是なり、二は同姓白専渡都岐磨子是なり（云々）の私領山林田畠數百町、永く当寺に施入せしめ畢んぬ」。実に、我等は是れ四衆帰依の濫觴なり、抑も又た一天興隆の道場に非ざらんや。

一、当寺極樂の曼荼羅の事

右当寺最初建立の後、百五十二歳の星霜を送り、大炊天皇の御宇（人代四十七代の王、天武天皇の孫、一品舍人親王の第七子。淡路廢帝と号す。

三子細有り）、一の臣下有り。世に横佩大納言尹統朝臣と号す。朝の賢知、世の神才なり。鍾愛の女在り。倚窓の中に養はれ、羅帳の下に長ず。其の性清素にして、紅塵に染まらず。人間の榮耀を軽んじて、志は偏へに弥陀の願海に通じ、林下の幽閑を事として、<sup>二四</sup>は深く安養の煙霞を頼む。自ら稱讚浄土經一千卷を書寫し、開題稱揚し、宝藏に安置せらる。花文改めず、露点猶ほ鮮やかなり。其の後、天平宝字七年（癸卯）六月十五日、蒼花を落として仏乘に歸し、丹心を抽んで菩提を祈る。親り道場に臨み、殊に誓約を立つ。「我、若し生身の弥陀に見ゆること無くんば、永く伽藍の門闥を出でざらん」。更に七日の光陰を契り、専ら満月の照臨を期す。懇念緩ならずして匪石の誠は至りて深く、冥応暗きこと無ければ明鏡の感は盃ぞ及ばざらん。然る間、同月廿日の酉刻、一の尼、忽然として化来す。禪容は色鮮やかに、三衣は袂襜し。窃かに相ひ示して云はく、「倩ら慇懃の儀を見るに、感歎の思ひに堪へず。汝、年来仏像を頭はさんが為に、頗る蓮糸を集むと雖も、機感未だ熟せず、誓願虚しきが如し。速やかに九品の教主を見んと欲せば、重ねて宜しく百駄の蓮茎を儲くべし。仏種は必ず因縁より生起する故なり」（云々）。本願禪尼、此の事を見聞し、踊躍身に余り、随喜骨に徹

す。仍つて、化人の告を注して、聖主の聴を驚かす。忝なくも釈感を垂れ、忽ちに詔命を降す。即ち忍海連宣旨を承はりて、蓮茎を近国中に催し廻る。纔かに一兩日を経るに、九十余駄の蓮茎出來す。化人、自ら蓮茎を折り、乱糸を繕り出だす。克く糸を調べ已りて、始めて清井を堀るに、水湛々として、浪溶々たり。水に臨みて糸を濯ぐに、其の色は自然に五色なり。傍人之を觀て、嗟歎せざるは莫し。同廿三日の夕べに至りて、女人の化来する有り。容貌端嚴にして、稱するを得べからず。女人、化尼に問ひて聞導、「蓮糸は已に調べ儲け得らるるや、如何」。答へて云はく「爾なり」。即ち糸を捧げて之を授く。茲に因りて化女、藁二把を執り、油二升に浸し、用ひて灯燭と為す。道場の乾の角に至り、戌の終りより、寅の始めに至るまで、三更の間、蓮糸を機上に打ち懸け、仏像を夜中に織り頭はし畢んぬ。竹を以て軸と為す（相伝に云はく、節無き一兩節間の竹と云ふ）。織女、敬つて一丈五尺の曼陀羅を頂戴し、以て化尼・願主兩人の前に懸け奉る。其の後女人、電光の消ゆるが如く、行方を知らず。化尼、觀無量壽經の誠説に依り、大曼陀羅の幽旨を開旨す。觀るに夫れ、曼陀羅の莊嚴奇麗嚴飭たるや、珠を貫きて飭るが如く、戒定恵解の光は互ひに輝き、金を伸べて瑩くに似て、紫摩黄金の色は各の映ず。南縁は一經発起の序分なり、禁父禁母の往蹤歴々として見るが如し。北縁は三昧正受の旨歸なり、善男善女の觀門明々として暗きこと無し。中台を仰げば、即ち四十八願莊嚴の浄土、眼前に皓然たり。下方を顧れば、又た上中下品來迎の花台、心中に森羅たり。是れ則ち、弥陀智願の力、他力を日域の雲に遷し、大聖定恵の徳、西土を南浮の界に顯はす。当に知るべし、一塵法界は本来無

得なり、大小長短豈に定相を論ぜんや。今、希有にして見るを得、誰か難遭の想ひを生ぜざらん。何ぞ暫だ暫く、三三当機を被りて、応相を示現せるのみならんや。即ち是れ遙かに退代を期して、宜しく利生を施すべし。重ねて四句の偈頌を作し、密かに二重の往縁を示す。「往昔迦葉說法所、今來法基作仏事、卿懇西方故我來、一入是場永離苦」。当に知るべし、此の処は即ち、古仏經行の庭、靈仙崛宅の境なり。朝野遠近、たの恃みを曼陀に懸くる者、老少尊卑、歩みを伽藍に運ぶ者、自づから除災与樂の望み達し、浄土菩提に至る益を深めん。機縁まがひ区なりと雖も、仰ぎて虚しからず。時に本願禪尼、且つは正しく生身の応相を拝し、且つは委しく化人の教訓を受け、泣くなく宿願の純熟を顧み、伏して仏陀の加被を喜ぶ。「嗚呼、妄想障り重くして、本望みを安養の砌に隔つと雖も、面見感深くして、今□にして涙を未曾の境に落とす。今日より、成仏に至るまで、命を軽んじて専ら守るべし、骨に鏤みて豈に敢へて忘れんや。抑も我が善知識は何れの所より来れるや、又た彼の織女は誰人なりや」。化尼答へて云はく、「汝知らずや、我が身は是れ、西方極樂世界の教主なり。織女は即ち、我が左脇の弟子観音大士なり。本願力を以ての故に、来りて汝を安慰せしむるなり。出離生死の期は已に境を得、往生極樂の行は茲に足るべし。深く慈恩を知り、仏徳に報ずべし」。此の如く再三相ひ語ること、懇懃なり、甚深なり。其の後化尼、西方を指して、孤雲に入り畢んぬ。方に今、願主、魂三四恍惚として、思ひ悄然たり。三五禪容去りて跡無く、只だ思ひを西刹蓮台の暮雲に寄せ、慈訓留まりて残り多く、屢しばば袂を三六東垂蓬屋の曉露に湿ほす。唯だ願はくは、今生永離の愁ひを翻して、浄土再会の縁

と為さん。爾しより降、三七曼陀の名称は広く異邦に聞こえ、靈像の帰依は普ねく諸衆に及ぶ。況んや禪尼、瞻仰の窓の前には秋月已に老い、觀想の床の上には春風幾たび廻る。十余年を送りて後、光仁天皇の御時、三八宝龜六年乙卯暮春三月の天、中旬第四の朝、宿願の如く往生を遂げ畢んぬ。時に、青天高く晴れ、紫雲斜めに聳く。音楽西に聞こえ、聖衆東に来る。端坐して頭低し、寂然として氣絶ゆ。面色は特に鮮やかに、形容は咲めるが如し。凡そ厥の、平生の靈徳、臨終の奇瑞、連綿として三九羅縷するに遑あらざるのみ。

〔本〕建長五年四〇〔壬丑〕四月廿五日〔北京四條の坊門西洞院に於いて書写〕

〔表書に云はく〕當麻寺縁起〔付けたり、私に云はく、此の本を以て大曼陀羅堂の修理の勸進帳と為す〕四一沙門「欠担」

### (3) 語注

- 一・流記…『當麻寺流記』。本願尼往生の翌月にあたる宝龜六年四月に撰録されたと称する偽書で、當麻曼陀羅縁起の物語内容を確立した文献。参考、拙稿「當麻曼荼羅縁起成立考」(『古代中世文学論考』四十三、二〇二一年四月)。
- 二・梵風…清らかな風の意で、仏の教えの喩。
- 三・白馬寺…後漢の明帝代に仏教がはじめて唐土へ伝わった折、最初に建立されたとされる寺。

四・青龍地…四天王寺をさす。『聖徳太子伝暦』太子二十二歳条「是歳。四天王寺始壊移、建<sub>二</sub>難波荒陵東下<sub>一</sub>。本願縁起云。敬

田院、斯地内有<sup>レ</sup>池、号<sup>二</sup>荒陵池<sup>一</sup>。其底深、青龍恒居処也。以<sup>二</sup>丁未歲<sup>一</sup>、始建<sup>三</sup>玉造岸上<sup>一</sup>。改<sup>三</sup>点此地<sup>一</sup>、鎮<sup>三</sup>祭青龍<sup>一</sup>、癸丑歲、壞<sup>三</sup>移荒陵東<sup>一</sup>。……此地敷<sup>二</sup>七宝<sup>一</sup>、故青龍恒守護<sup>一</sup>（東大寺図書館藏文明十六年写本による）。

五・推古天皇二十年〈歲次壬申〉…西曆六一二年。

六・因准…先例などに準拠すること。

七・傾産業…財産をつぎ込むこと。参考、「富者傾<sup>二</sup>産業<sup>一</sup>、貧者失<sup>二</sup>家資<sup>一</sup>」（菅原文時・封事三箇条・請禁奢侈事。本朝文粹卷二所収）、「富者傾<sup>二</sup>産業<sup>一</sup>、貧者跛而及<sup>レ</sup>之」（大江匡房・洛陽田樂記）。

八・成風…建築物を立派に造り上げること。もとは工人が斧を振るって風を起こす意で、『莊子』徐無鬼第二十四の「匠石運<sup>レ</sup>斤成<sup>レ</sup>風」に由来する表現。

九・白鳳二年〈癸酉〉…西曆六七三年。

一〇・紫泥…天子の詔書。詔書を封じるとき、紫色の印泥が用いられたことから。

一一・花界…仏寺の意。『事物異名録』卷二十七・仏積部・仏寺「花界、花宮…皆仏寺名」。参考、「暁入<sup>二</sup>白蓮宮<sup>一</sup>、瑠璃花界浄」（元稹・与楊十二季三早入永寿寺看牡丹。元氏長慶集卷五所収）。

一二・刑部卿親王〈天武天皇第九御子〉…刑部親王（？）…七〇

五）。本来「刑部」は親王の諱だが、ここでは刑部卿（刑部省の長官）の意に誤解している。

一三・感応道交…仏から人間への働きかけと、それを感じとる人間の心とが融和すること。

一四・朱雀元年〈壬申〉…西曆六七二年。『日本書紀』天武紀上の同年五月条には、大友皇子が軍事行動の準備のために人夫を集めている旨を、大海人皇子（後の天武天皇）の舍人・朴井連雄君が大海人皇子へ報告したことが見える。壬申の乱の勃発はその翌月。

一五・白鳳十年〈辛巳〉…西曆六八一年。

一六・経始…建築物を造り始めること。『詩経』大雅・靈台「経<sup>二</sup>始靈台<sup>一</sup>」（毛伝「経、度<sup>レ</sup>之也」、鄭箋「度<sup>二</sup>始靈台之基止<sup>一</sup>」）に由来する表現。

一七・成風…注八参照。

一八・満月尊…仏の喩。参考、「白毫新におがまれ給ひし満月の尊容も、御くしはやけおちて大地にあり」（覚一本平家物語・卷五・奈良炎上）。

一九・一揆手半…「一揆手」は、親指と中指とを張った間の長さ。

二〇・一体者…飛来給…『當麻寺流記』では、四天王像は四体ともに百済から飛来したとする。この當麻寺金堂四天王像は、元来は講堂に安置されていたもので、治承四年（一一八〇）の兵火による講堂焼失の際、旧多聞天像は失われ、他三体は新造された多聞天像とともに金堂に安置されるようになった（岩田茂樹「當麻寺金堂の弥勒仏像と四天王像について」〔展覧会図録『當麻寺』奈良国立博物館、二〇一三年〕参照）。ここでは、多聞天像の作風が他三体とは異なる理由を説明する意図のもと、一体のみ飛来という形に改めたものか。

二一・高賀茂老翁間駕介磨子／白専渡都岐磨子…『私聚百因縁集』卷八一―一では、高賀茂間賀介麻呂を役行者の父、同氏白専渡都

岐麻呂を母としている。

二二・有子細…廢帝（淳仁天皇）が孝謙上皇によって廢位されたことをさすか。

二三・紅塵…俗世の煩わしさの喩。

二四・開題…新たに書写した經典を供養する儀式。

二五・花文不改…本願尼筆の『称讚浄土経』には誤写が一切なく、修正痕が全く存在しなかった、の意か。

二六・天平宝字七年（癸卯）…西暦七六三年。

二七・蒼花…毛髮の意。原義は毛髮の神の名。参考、「蒼華何用祝、苦辞亦休吐」（白居易・和祝蒼華（蒼華髮神名）。白氏文集・二二五三番）。

二八・門閫…「閫」は敷居の意。

二九・満月…注一八参照。

三〇・禪容…静かなたはずまい。仏や高僧の形容。参考、「然間、去弘長第二壬戌黄鐘二十八日、彰前念命終之業成、遂後念即生之素懷。嗟呼禪容隱何在」（覚如・報恩講式）。

三一・三昧正受…『観無量寿経』の定善十三観に説かれた観想念仏をさす。『観無量寿経』序分・欣浄縁「唯願世尊、教我思惟、教我正受」、善導『観経疏』玄義分・定散料簡門「言正受者、想心都息、縁慮並亡、三昧相応、名為正受」を踏まえた表現。

三二・旨帰…教えの根幹の意。

三三・当機…仏が、聞く者の機根（能力素質）に応じた導き方をすること。

三四・恍惚…ぼんやりしているさま。恍惚。

三五・禪容…注三〇参照。

三六・東垂…東の果て。「垂」は辺境の意。西方極楽浄土からみて、この地が遙か東にあることをいう。

三七・曼陀之名称…普及諸衆…浄土宗西山義祖・證空（一一七七一—一二四七）が、當麻曼陀羅の模本を多数作成して諸国へ弘め、さらに唐土へも贈ったこと（聖聰『當麻曼陀羅疏』卷八）をさすか。

三八・宝龜六年（乙卯）…西暦七七五年。

三九・羅縷…こまごまと述べること。

四〇・壬丑…建長五年（一二五三）は正しくは癸丑。

四一・沙門…<sup>欠損</sup>…欠損箇所は「證空」か。小松茂美「當麻曼茶羅縁起」と「稚児観音縁起」（小松編『當麻曼茶羅縁起・稚児観音縁起』、続日本の絵巻、中央公論社、一九九二年）、拙稿「中世前期における當麻曼茶羅縁起の系譜」（『都留文科大学研究紀要』九十四、二〇二二年十月）参照。